

コラム 鉄道模型の歴史

鉄道模型は本物の鉄道を建設する際の宣伝品として 19 世紀初頭のイギリスで開発された。その後 1853 年、ロシアのプチャーチン来航時や、1854 年ペリー来航時に、役人の前で模型蒸気機関車の走行を実演したのが日本における鉄道模型の始まりである。

1891 年、ドイツのメルクリン社が、それまでばらばらであった車輪幅に対して 1 番ゲージや 2 番ゲージなどの統一的な規格を制定し、1922 年にイギリスのピング社がそれまで主流であった 0 ゲージの半分の大きさである 00 ゲージを開発。後に、このゲージは H0 ゲージと改称され現在でも海外においては主流ゲージとして存在している。

再び視点を日本に戻してみると、雑誌『子供の科学』において本間清人が 50mm ゲージを、「科学画報」において香西健が 35mm ゲージをそれぞれ提唱するなど日本産ゲージも多く開発されていた。

1965 年、関水金属(KATO)によってプラスチック製車輜や線路が発売され日本製の N ゲージが、国土面積の小さな日本においても省スペースで鉄道模型を楽しむことができる規格として市場に流通することとなった。その後、車輜数の少なかった日本型 N ゲージに対して、外国型 N ゲージ車輜が多数出回っていた状況があったが、1974 年にトミー(現タカラトミー)が「トミーナインスケール」というブランドで日本型車輜の製品化を開始し、1976 年には「TOMIX」ブランドの展開を始めた。この TOMIX ブランドは道床付きレールシステムを日本で初めて採用するなど当時としては画期的であった。

こうして 1975 年以降、学習研究社(現在は模型業界から撤退)、ホビショップ MAX(現:グリーンマックス)、エンドウ(現在は H0 ゲージのみ)、中村精密(倒産)、しなのマイクロ(倒産、一部は現在のマイクロエースに引き継がれている)などといったメーカーが、次々と N ゲージに新規参入していった。

このように、多くの愛好家が待ち望んでいた N ゲージの日本型車輜が大量に産み出されたのを受けて、1970 年代後半には空前の「N ゲージブーム」が起こることとなった。また愛好家のための展覧会なども数多く行われた。しかしこのブームも 1983 年のファミリーコンピュータの登場など

娯楽の対象が増えたことによって 80 年代中盤には終焉を迎えることとなり、この時模型から撤退するメーカーも多かった。1990 年代に入っても鉄道模型市場は縮減の一途をたどり、個人経営店など中小規模の鉄道模型店やデパート等の鉄道模型売り場の多くが廃業・閉鎖されていった。

一方、2000 年代に入り、小型玩具ブームの波に乗って、車輛長を従来の N ゲージ車輛の半分に抑えたバンダイの「B トレインショーティー」や、地方の私鉄車輛などそれまで大手鉄道模型メーカーが製造してこなかったような車輛をラインナップに盛り込んだトミーテックの「鉄道コレクション」などコンビニや量販店で安価で購入できるタイプの製品が多数出回るようになった。

更に、一般の N ゲージも大型家電量販店が鉄道模型の取り扱いを始めたり、鉄道模型を扱ったインターネットショップも多くなるなど模型の購入ルートにも変化が生じている。新たに参入してきた、マイクロエースなどに刺激を受けた、関水金属（KATO）、トミー（TOMIX）、グリーンマックスなども商品展開を強化し、2000 年代半ばから再び N ゲージ市場が力を伸ばすようになった。現在も、N ゲージ市場は堅調な伸びを示している。

(松葉 隼)